

パン屋、ジビエ料理に挑戦!! (8)

文 木村安兵衛

text by Yasube Kimura

ついに今年、シカを獲りました。猟期が始まったのです。

思い起こせば昨年の猟期に初めて鉄砲を担いで山に入りました。北海道ではシカにからかわれ、本州では弾がシカを避ける様に飛んで行くのを悔しい思いをしながら眺めていたのです。猟師ではなく動物愛護団体の人みたい、などと揶揄されておりました。

誤解を恐れずに言うと昨年の猟期が終わってから、仕事以外の時間はシカを撃つ事ばかりを考えておりました。街を歩いている時は向こう側の通りを行きかう人々との距離を目測で測る練習。自然観察ガイドブックを買い、シカやイノシシの足跡や糞、ヌタ場といった動物が泥浴びをする場所を見分ける勉強。シカの鳴き声の勉強、鳴き声の練習。動物園にてシカ、イノシシ、熊の行動観察などを行ってきました。ちよつとしたストーカーになった気分です。

ある時エサをあげられる動物園に行きました。もちろんシカの行動観察が目的です。周囲の来園者と同じように笑顔を作りながらも鋭い視線をシカに向けるのです。もちろんシカは警戒

して寄ってこないと思っておりました。しかし私の殺気を感じるとどこか「エサをくれ！早くくれ！」とばかりに寄ってくるのでありました。私は「万が一でも僕と山で出会ってしまったら早く逃げるんだよ。絶対にエサもらいに寄ってきてはいけないよ」等と話し掛けながら人参をあげるのです。まるで犯罪者が公園で子供たちに防犯レクチャーをしている様です。

そんな時にハプニングが起きました。お腹を空かせたシカはもつとくれ！とばかりに私に噛みついてきたのです。私はシカを撃ち殺す事ばかり考えてきたのです。いわば捕食者であります。オオカミがシカに噛まれてしまったのと同じ状況であります。その瞬間に反射的にシカをひっぱたいてしまいました。びっくりしたシカは逃げるのです。動物園を出てしまえば駐車場まで逃げ行ってしまうのです。これは大事になってしまふ！と慌てて私は追いかけます。駐車場から園内までシカを羽交い絞めにしたまま連れ戻す事になるのでした。呆然とする係員さんに「ちゃんと連れて帰りましたよ」と笑顔で報告するのであります。

「シカを可哀想と思ったら弾は当たらないぞ」「この夏はシカの事ばかり考えて過ごせ」という師匠の言葉どおりシカをやっつける事ばかり考えてきました。しかしシカや動物が嫌いなのかという好きなのです。好きだから生態を勉強しても苦にならない。好きだから一日中追いかけても苦にならない。確かに害獣としての側面もあるけれども、嫌いにならない。殺してしまいたい程に好きなんです。これは今まで感じたことのない新しい感情が芽生えてしまいました。

ストーカーってこんな気持ちなのかな？

Profile

1969年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、千代田生命保険相互会社に入社。その後アメリカで唯一のFDA（米国食品医薬品局）研究機関である米国立製パン研究所へ留学、ベーキングサイエンスを研究する。ニューヨーク、フランスにて修業を積んだ後、その腕前と経営センスを見込まれ、エリック・カイザーの在日パートナーとして、2000年に株式会社ブランジェリーエリックカイザージャパンを設立。2001年メゾンカイザー 1号店として東京・高輪に店舗をオープンし、2017年現在29店舗を数える。

